

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があつて、友達がいいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウド・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。

あたかも、改変された世界から排除されるように……。

クラウドの選んだMBデバイス〈ジェノクラウド〉、その起動試験中に彼女が暴走するハプニングが起きてしまう。現実世界でクラウドの暴走を止めようと〈機獣少女〉達が戦う一方、仮想空間〈想刻の間そうこくま〉では、クラウドが〈ジェノクラウド〉の仮想人格と対話を行い、自分の中に〈カタストロ〉の欠片かけらが残っている事を知る。不安要素の排除を提示する〈ジェノクラウド〉に対し、〈カタストロ〉の本意を悟ったクラウドはそれを拒否し、別の解決策を見出す。

そうして〈ジェノクラウド〉に認められたクラウドは、真の〈機獣少女〉となるのだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

生身であれば、自然界でもっとも弱い生物は人間だろう。

それがこうしてゼヘナの覇者となっている理由は何か。

一つは道具を作り出し、それを使いこなす器用さがあったから。

もう一つは高い知能——すなわ即ち、強い相手に勝つための作戦を考えられたためだ。
武器と戦術。

この二つを生み出した人間に敵はいなくなった。

だが、それは同時に弊害も生んだ。

技術の進歩によって武器が発達すると、それを効率的に使う事を忘れさせる。圧倒的な力があれば、ただ単純に威力を振るうだけで事足りるからだ。虫を潰すのに、いちいち作戦を立てる必要がないように。

そして、それは対〈カタストロ〉戦にも同じ事が言えた。

単体でしか現れず、行動原理も単純で、対する〈機獣少女〉側は必ず二名以上で対応する体制が整えられている。油断さえしなければ、力押しで勝ってしまうのだ。

無論、〈機獣少女〉となるための戦闘訓練はあるし、なつてからも自主的に鍛錬たんれんを積む者がほとんどではある。それでも、勞せず倒せる敵が相手なら、戦い方は雑になる。

〈ジェネレーター〉に取り付き『消滅現象』を起こそうとする〈カタストロ〉は、人間にとって天敵だが、〈機獣少女〉にとっては脅威と呼べなくなっていた。

彼女等に慢心が生まれるのは、致し方ない事だったかもしれない。

その結果が〈プレケース〉との緒戦だ。

単体での戦闘力は〈カタストロ〉と大差ないが、見る者によっては嫌悪感を抱く外見に加え、群体で行動する性質は厄介な事この上ない。単純な戦力としても、心理的な威圧感プレッシャーという意味でもだ。

奇跡的に死者こそ出なかったが、多くの〈機獣少女〉達が重傷を負い、戦線を離脱する結果となった。

だが、人間は学習する。危機的状况となれば尚更だ。

慢心を捨て、己の戦技を見つめ直し、戦術を駆使する事を思い出した。

例えば、彼女等のように。

「——ふっ」

短く息を吐き、チャイナ服を思わせるMBジャケットを身に纏まとった中学生くらいの〈機獣少女〉が、自分の身長より長い得物えものを突き出す。細長い円柱状の棒の先に、青龍刀を思わせる刃が付いたそれは、分類上は槍スピアだが、見た目は薙刀ゲレイブに近い。

「滅せよ！」
アニヒレート

幅広い
幅広の穂先が〈ブレケース〉の顔面を串刺しにすると、少女はすかさず発動言語
を唱え、相手に流し込んだ機力を威力に転化させる。先日は過剰な量の機力を流し込
でしまったために、無駄な消耗をした上、撒き散らされた大量の体液を浴びる結果となっ
てしまった。なので、今回は必要十分な機力のみを流し込んだ。冷静になれば、そのく
らいの制御はなんでもない。

威力に転化された結果である青い光が生まれると、軟体動物のような触手を痙攣させ
つつ、やがて目の前の〈ブレケース〉は息絶えた。

奇妙な生物だと思っ。ぱつと見はカブトムシやカナブンのような甲虫なのだが、蜥蜴の
ような尻尾があり、前述のような触手もある。それがカマキリのように屹立し、しかも
成人男性ほどの全高なので、目の前にするとリアルな恐怖感に襲われる。いっそ巨大怪獣
ほどの大きさであれば、向こうは此方を意識すらしないが、目が合うようなサイズの脅威
というのは、殺される際の恐怖を想像出来てしまうのだ。ふちりと踏み潰されて終わりで
はない、手足を食い千切られたり、臓物を抉られたりと、継続的な痛みに苛まれ続ける。
それこそ、肉食動物に捕食されるような原初的な恐怖……。

「……………」

〈ブレケース〉に殺される場合、どんな末路が待っているのか。生態が判らない以上、捕
食される可能性もある。見た目は虫だが、肉食性の種類もいるのだから。

だが、それは今考えるべき事柄ではなかった。

「——先輩！」

「ッ!？」

自分を呼ぶ声に我に返り、咄嗟に動く。まだ戦闘は終わっていないのだ。

振り返り、小柄な背中を視界に入れる。自分と同じ意匠のチャイナ服風のMBジャケ
ットを身に纏っているが、明らかに丈が余ってしまった。まだ中学校が上がってい
ないような年齢なら、それも致し方ないだろう。両手で握った巨大な得物とのギャップが
凄まじいが、〈機獣少女〉の強化された筋力なら造作もない。

長い棒の先に物々しい凶器——斧が付いたそれは、いわゆる戦斧である。

「うう……ッ！」

小柄な少女が握った戦斧に〈ブレケース〉の一对の触手が巻き付き、互いに引っ張り合
っている。引き合う力が拮抗しているのか、戦斧の少女は両足を強く踏みしめ、武器を奪
われまいと抗っていた。

「——ッ！」

戦斧の少女の脇を駆け抜け、槍の少女が〈ブレケース〉に肉薄する。

「――滅せよ!」

動きを封じられたも同然の敵にMBデバイスの穂先を突き刺し、殲滅するのは容易かつた。

すぐさま方向転換。直前に倒した〈プレケース〉が頽れるのを見届ける事なく、次の標的に対処する。

「!? ――伏せて!」

「ひゃい!」

急な警告に、戦斧の少女が慌てふためきつつも、言われた通りに身を伏せる。同時、風を切る音と共に、彼女の頭上を一瞬で何かが通過した。

穂先に青龍刀を備えた槍――警告を発した少女のMBデバイスだ。

――ギイイイイイイイイツ!?

聞くものの神経を擦り減らしそうな悲鳴。

槍は頭上から戦斧の少女を急襲しようとしていた〈プレケース〉に深々と突き刺さり、共に緩やかな放物線を描きながら地面に落ちた。

「――くたばりなさい」

仰向けの姿勢で腹部から槍を生やした〈プレケース〉を睥睨し、自分の得物を握った少女は、続けて敵を殲滅するための発動言語を発した。

生命活動を終え、〈プレケース〉が地面に転がるのを確認し、周囲を見渡す。まだ別の〈機獣少女〉達と〈プレケース〉の戦闘は続いているが、担当分――明確な割り振りはされていないが――に該当する敵は見当たらない。戦闘を継続している他の〈機獣少女〉達にも苦戦している様子が見られない以上、余計な加勢は却って邪魔になる。なので、槍の少女は臨戦態勢は維持したまま、へたり込んでいる戦斧の少女を労う事にした。

「よくがんばったわね」

「えへへ……。私、少しは先輩のお役に立てましたか?」

「ええ、上出来よ。でも、ごめんなさい。あなたの撃墜数を横取りしてしまっているみたいだ」

彼女の立てた戦術――それは徹底した二人一組だった。戦斧の少女がサポート役で、自分が積極的に前に出てトドメを刺す。本来なら臨機応変に攻守を入れ替えるのが理想だが、戦斧の少女はまだ練度が低い。それでも、〈機獣少女〉として最低限の実力はあるし、何より強い責任感を持っているため、背中を任せる事に不安はない。

背中を護ってくれる相手がいるというのが、こんなにも安心出来る事なのだと、単体でしか現れない〈カタストロ〉を相手にしていた頃は知らなかった。

「全然！ 気にしないでください、そんな事！」

両手をばたばたと振るオーバー・リアクションで、そんな風には微塵も思っていないと意思表示をする後輩の必死な仕草に、思わず笑みが零れる。

ほんの数日前であれば、こんな気持ちは抱かなかつた。ルーチンワークとも呼べる〈カタストロ〉との戦いで、戦斧ヘルバードの少女はお荷物だった。鈍臭いというか、飲み込みが悪いというか、とにかく手間がかかった。だから、戦場では常に彼女は後方に下がらせ、さつさと自分だけで殲滅せんめつしていた。先輩という立場でありながら、彼女を指導するのが煩わしかったのだ。

しかし、その結果が先日の〈ブレイクス〉との戦闘である。戦斧の少女は本当に足手まといで、何も出来なかつた。

当然だ。

自分は彼女に、何も教えなかつたのだから。

窮地に陥おちいって、初めて後悔した。

なぜ、ちゃんと戦い方を教えてやらなかつたのか。

なぜ、もっと彼女と向き合わなかつたのか。

あんなに煩わしく思っていたはずなのに。

結局、自分達を窮地から救ってくれたのは〈戦姫〉と、彼女と共に駆け付けてくれた〈難攻不落〉の二人だった。

「落ち着いたら、もっと色々教おしえてあげるから」

このわずかな期間に戦斧の少女に教えられたのは、サポート役の基本的な位置取りポジショニングだけ。しかし、それだけで戦力としての有効性は格段に上がった。ちゃんと指導すれば、彼女はもっと伸びるだろう。

「今はサポート役で我慢して」

不満や反感を持たれてもいい。それは自業自得だ。

自分の事は嫌ってくれていい。彼女がこの局面を乗り越えられるのなら。

「とんでもないです！ 私、がんばりますから！ いっぱい教えてください……！」

「……………」

少し卑屈になっていたのかもしれない。後輩のまっすぐな言葉に、槍スピアの少女は内心で苦笑した。ほんの少しの自嘲を込めて。

「…………ええ。嫌というほど教えてあげるわ」

「はい！」

戦斧ハルバートの少女が元気の良い返事をする、タイミングを計ったように通信回線が開いた。このエリアを担当している別の〈機獣少女〉からだ。〈機獣少女〉に階級や序列はないが、部隊として行動する以上、代表者は必要となり、この場では彼女がそれに該当する。

『——付近の〈ブレイクス〉の殲滅せんめつを確認。負傷者がいる場合は報告を』

代表者の少女の言葉に、通信の向こう側から、割り当てられたコールサインの順に『負傷者なし』の返答が続く。緒戦の時とは、〈機獣少女〉達の状況も心構えも違うのだ。

『全員、健在ね。それでは、戦闘態勢を解除して、警戒態勢に移行。交代までもう少しだから、がんば——え？ どういう事……？』

それまで明瞭に指示を出していた代表者の少女の言葉が、戸惑いに変わった。

「どうしたんでしょう？」

戦斧の少女が小首を傾かしげる。

通信で聞く限り、代表者の少女の声に緊急事態という雰囲気はなかった。なので、せいぜいローテーションの変更で担当時間が延びたとか、その程度だろうと判断し、スピア槍の少女は「さあね」と気軽に答えた。無駄に後輩の不安感あおを煽りたくなかったから。



同時刻。

オオミヤ・シテイ東部方面、第3号〈シエネレーター〉設置区域。

「——〈オーデイン〉、突っ込むわよ！」

『了解 突撃形態』

明るいつ茶色のロングヘアをなびかせた少女が叫ぶと、彼女が手にした得物えものが機械音声で答えた。〈機獣少女〉と、そのMBデバイスである。

甲冑かっちゅうの意匠いしょうを感じさせるパーツを付けたドレスアーマーを身に纏まとい、馬上槍型MBデバイスを構える姿は、まさしく女騎士といった風情ふぜいを感じさせる。

周囲では別の〈機獣少女〉達も戦っているが、彼女は単独で〈ブレイクス〉の一群を迎え撃とうとしていた。迎撃戦力が不足している訳ではなく、彼女がそれを望んだのだ。

「——今よ！」

迫る六体の〈ブレイクス〉に対し、絶好の距離とタイミングだと判断した少女が発した。大地を踏みしめるように腰を落とし、馬上槍を前方に突き出し、発射された弾丸のように一瞬で加速した。地表すれすれを滑るように突き進み、〈ブレイクス〉の群れの中心を突っ

切り、着地と同時に、右足を軸にコンパスのような華麗な半回転を決めた。

彼女の視界の先には、すれ違い様に発生した衝撃波で跳ね飛ばされた〈プレレース〉が各々で立ち上がり、少女の姿を探す光景が見て取れた。

しかし、彼等が再び少女の姿を昆虫のような複眼に捉える事は叶わない。

「――滅せよ！」

発動 言葉を発すると共に、少女が指を鳴らす。

その直後、地上に六つの火花が咲いた――六体の〈プレレース〉が、それぞれ同じタイミングで、木っ端微塵に砕け散ったのだ。肉も骨も体液も、一切の原形を留めず。

少女がすれ違った瞬間、前面に展開していた機力の力場が〈プレレース〉に触れ、その体内に機力を注入、先の発動 言葉によって威力に転化した結果だ。通常であれば、あそこまで徹底的に破壊はされない。それだけ大量の、いつそ過剰とも呼べる量の機力を流し込んだのだろう。

しかし、大量の機力を消費したはずにも関わらず、少女の表情に疲労の色はない。それは彼女の、人並み外れた機力容量に起因している。要は、貯蔵出来る機力の量が多いのだ。

キリエ・ソウマ。

馬上槍型のMBデバイス〈オーディン〉を持つ、高校二年生の〈機獣少女〉である。

容貌は極めて整っており、可愛いというよりは綺麗だと評されるだろう。野に咲く花のような慎ましきではなく、ショーケースに並ぶ宝石のように、自らの美しさを主張するタイプに見える。

実際、彼女は派手さを求め、演出や外連にこだわる。それは先の機力の無駄遣いからも窺える。

実力はあるのだが、性格面に難がある――キリエとはそういう少女だ。

「さて、次に行きましようか」

MBジャケットとデバイスの冷却作業が終わるや、『狩り』を再開しようとする周囲を見渡す。

しかし――

「……撤退してる？」

キリエの印象の通り、周囲の〈プレレース〉が離脱していく。その光景は確かに『撤退』だろう。

「ちよ、待ちなさいよ！ まだ終わってないわよ!?!」

今日のキリエは苛立っていた。

数時間前に〈戦姫〉――彼女が一方的にライバル視している〈機獣少女〉であるところ

のカナコ・T・シングウジの前で、失態を演じてしまったからだ。

しかし、憤慨するキリエの言葉など聞くはずもなく、残存していた〈ブレイクス〉はその場から姿を消した。

「なんなのよ、もう!?!」

苛立ちを隠そうともせず、キリエは〈オーディン〉を乱暴に足元に突き立てる。全長の四分の三を占める円錐状の穂先が地面を抉り、主が手を離しても、MBデバイスの馬上槍は悠然とその場に屹立し続けた。

「一度集合だそうよ……えっと、〈ミストルテイン〉さん?」

このエリアを担当していた別の〈機獣少女〉の一人が、通りすがりに声をかけてくれた。本来、MBデバイス起動中は通信回線を開いておく決まりのだが、干渉される事を嫌うキリエはそれを閉じており、指示を聞き逃していたらしい。

しかし――

「違う! 〈グングニル〉よ!」

札を述べるべきこの状況で、虫の居所が悪かった事も手伝って、キリエは声をかけてくれた少女に癩癩を起してしまっていた。

当然、親切に声をかけてくれた少女に罪はない。名前を間違えるのは確かに失礼な行為だが、キリエの二つ名である〈グングニル〉というのは自称なのだから、覚えろという方が無茶なのだ。

ちなみに、〈グングニル〉は別名『魔槍』とも呼ばれており、自分のファミリーネームである『ソウマ』とかけたものである。

「ソウマさん、またやってる……」

「あの子も可愛そうに」

「彼女、実力はあるのにね」

恩を仇で返されている少女と同じ方向から来たであろう、別の〈機獣少女〉達がひそひそと言葉を交わしていると――

「あんた達! 聞こえてるわよ!?!」

キリエの苛立ちメーターが振り切れようとしていた。

第二十三話

『シンショウヒツバツ』

へL. C. ファクトリー」が所有する、サッカー場が二つは並べられそうな広大な演習場の端に、バラエティに富んだ衣装を身に纏った少女達がいた。クラウのMBデバイス起動試験を終えたメンバーだ。

地球から来た異邦人である、流遠やみひめとクラウ・P・ブラン。
ゼヘナの住人であるツバキ・タカチホとカナコ・T・シングウジ。

そして、どちらとも違う場所から来たベアトリーチェ・ファフロウ。

暴走するクラウと戦闘になったため、それぞれ疲弊しているはずだが、クラウを含めた全員が壮健そうに見える。

其処へ、管制塔から出てきた三人も合流する。

先頭を行くのは妙齢の女性である。長い金髪と、穏やかな青い瞳が印象的な美女なのだ。が、美人にありがちな近寄りがたさが微塵もない。雰囲気柔らかく、良い意味で隙がありそうに思えるのかもしれない。

ロゼット・コダール。

〈機獣少女〉関連装備の研究・開発の大手であるへL. C. ファクトリー、その最高責任者である。彼女自身、優秀な技術者で、『ロゼット・コダール』とはへL. C. ファクトリー創始者の名を襲名したものであったりする。

余談だが、女子大生のような見た目に反して、三十二歳である。

「みんな、まずはおつかれさま。試験は無事終了だよ」

ロゼットがにこやかに告げると、改めて一行に安堵した空気が流れる。事なきを得たとはいえ、試験中に暴走したクラウの猛威は、それだけの緊張感を与えるに充分だった。

「MBジャケットは解除していいよ。クラウ、出来そう？」

「はい。やってみます」

クラウにとっては初めての事だ。家に帰るまでが遠足であるように、MBジャケットを解除し、MBデバイスを待機モードにするまでが起動試験だと思えば、油断は出来ない。

「——〈解放〉」

ロゼットの言葉に答え、クラウがMBジャケットを解除するための終了言語を告げる。すると、ドレス状態だった衣装が一瞬で再構築され、元の私服へと変わった。いや、正確には戻ったと言うべきだろう。両手の爪を思わせる手甲も、背中ウイング・ユニットも、腰に生えていたテール・スタビライザーも、すでに消えている。

「うん。良く出来ました」

「あ……はい——」

小学生くらいの子供を褒めるような賛辞だが、不思議とロゼットが言うとう馬鹿にしてい

る感じがしない。対するクラウは見た目が早熟なため、こういった褒められ方がむしろ新鮮なのか、恥ずかしくも嬉しそうに見える。

「——綺麗な指輪リングですね」

MBジャケットを解除したクラウの左手に見える指輪を指してそう言ったのは、ロゼットと一緒に現れた少女だ。

見た目はクラウと同年代といった印象だが、実際には小学六年生の彼女と違い、見た目の通りの十六歳である。緩く波打つ銀色のセミロングと、神秘的な金色の瞳の組み合わせは、見る者にミステリアスな印象を与える。

タオエン・ファフロウ。

ヘアトリーチエの姉であり、その頭部と腰部には、狐きつねを思わせる耳と尻尾しっぽが確認出来る。
「光沢のある深い黒。まるで黒曜石オプンディアンのようです」

普段は淡々としており無表情だが、今のタオエンは口調も雰囲気も穏やかで、途端とたんに接しやすいつ印象が変わる。

「あ……」

タオエンに言われて、クラウはようやく、自分の左手の中指にある指輪の存在に気付いた。無意識に左手を掲かかげると、太陽の光を反射して指輪が光沢を放つ。

「それがMBデバイスの待機モードだね。渡した時と形状が変わるのは、契約後によくある事だよ」

ロゼットの言葉に、クラウの表情が穏やかなものになる。それは単純な安堵によるものだけでなく、もつと複雑なニュアンスも含まれているように感じられる。MBデバイスとの契約の際、契約者は仮想空間にて、コアである機獣と対話をするらしいが、その際に何かあったのかもしれない。そう判断したロゼットは、少しでも話題を変える事にした。

「そういえば、MBデバイスの名前は決まった？」

MBデバイスの名前の命名権は、基本的に「機獣少女」にある。機獣だった頃に与えられた名前を使う場合もあるが、すべての機獣が固有の名前を与えられている訳ではない。

「あ、いえ……」

「そっか。じゃあ、これはあくまで参考までに聞いてほしいんだけど——『ラインハイト』って、どうかな？」

「ラインハイト……」

ロゼットが提案した名前を、一文字ずつ噛みしめるように復唱するクラウ。その表情を端的に表現するのは難しい。忘れていた、しかし大切な記憶を思い出した時の、懐かしさや切なさが入り混じったような……そんな表情に見える。

「……どういう意味なんです？」

ロゼットに訊ねたのは、彼女と一緒に現れた最後の人物で、この場にいる唯一の男性である。少し長めの黒髪と、同じく黒い瞳の、東方大陸ではよくある特徴を備えている。身長や体格も一般的な成人男性とほぼ変わらないが、高校三年生らしく、まだ少し幼さが感じられる。もつとも、若者らしい覇気のようなものは一切なく、気怠い雰囲気けだるを纏まとっているが。

橘 アサト。

やみひめやクラウと同じ、地球から来た異邦人である。

「どうしたの、アサト君？ 急に敬語になって」

ロゼットがアサトとまともに会話をしたのは管制室に入った時で、その際は敬語は使っていないかった。

「さつきは余裕がなかったというか、それに一応、年上ですし……」

「えー。おばさん扱いされるのは傷付くなあ」

「いや、別にそんなつもりは……」

冗談のつもりで不貞腐ふてくされてみせたのだが、アサトは思いのほか動揺したらしく、微妙にだが表情に焦りが見えた。やはり、まだ少年なのだろう。

「ぶふ。冗談だよ」

「……………」

からかわれたと気付いたのだろう。アサトは無然むぜんとした表情を浮かべている。

「ごめんごめん。お詫わびって訳じゃないけど、苦手なら無理して敬語とか使わなくていいよ。公おおやけの場じゃなければ、特にうるさく言われるような事でもないし」

「……ファーストネームで呼ぶのもか？」

「あ、馴れ馴れしかったかな？ アサト君は、『アサト君』って感じだったから……嫌ならやめるよ？」

さっそく敬語を崩してくれたのは嬉しいが、呼び方まで指摘されるとは思っていなかった。地球人は——もしくは男の子は——色々細かい事を気にする傾向にあるのだろうか。「いや、なんというか……別にいいけど」

そう答えるアサトの表情は、自分でも感じている気持ちの正体が判らず、面倒くさくなつた——そんな風感じられる。

「じゃあ、アサト君って呼ぶね」

「……好きにしてくれ」

納得は出来ていない。だが、抗あらがうのも面倒くさい。彼の心情を代弁するなら、そんな

ところだろう。

「話を戻そうか。ラインハイトっていうのは『純粹』とか『無垢』っていう意味。クラウドのMBジャケットが変化した時、私はそういう印象を強く感じた」

これはアサトに対してだけでなく、この場にいる全員——特に後半はクラウドに向けた言葉だった。

「もう一つ——創始者ロゼット・コダールの残した資料にも、そんな記載があったんだ。〈ジェノクラウエ〉の強化プラン……というより、それが目指していた本来の姿だったらしいよ」

ロゼット・コダールの最高傑作の一つであった機獣。しかし、状況がそれを許さなかったのか、目指していた本来の姿とはならず、未完のままに終わったらしい。

「もし、〈ジェノクラウエ〉が本来の姿となっていたら、こんなイメージじゃないか……クラウドのMBジャケットを見て、私はそんな風に感じたんだ」

不思議な感覚だった。襲名しただけの自分が、まるで創始者本人のような気持ちになっていた。

「純粹、無垢……ラインハイト——」

自分の言葉を聞き、左手の指輪——待機状態のMBデバイスを見つめて、呟くクラウドを、ロゼットは優しい気持ちで見守った。



〈L. C. ファクトリー〉に戻ると、MBデバイスを起動させた事による異常がないかのチェックのため、ロゼットとクラウドは検査室に直行し、残りのメンバーは談話室で待機していた。

ちなみに、クラウドのMBデバイスの名前が〈ラインハイト〉に決定したのは言うまでもない。

「疲れた時には、甘いものだよねー」

談話室に着くなり、ベアトリーチェはお茶請けのチョコレートクッキーをぱくついていった。余程気に入ったのだろう。

フルネームはベアトリーチェ・ファフロウ。

〈エグゼキューター〉という存在で、年齢は十三歳らしい。茶色のショートヘアと、猫を思わせる黄玉のような黄色い瞳の少女。見た目は普通の女の子だが、猫のような耳と尻尾がある。

「……よく食べられるね。私は疲れて食欲ないよ」

ベアトリーチェとは対照的に、やみひめは菓子には手を付けず、湯気を燻らせるティーカップを両手で口元に運ぶ。

流遠るとおやみひめ。

〈機獣少女〉だが、明らかに規格外の能力を持つ、小学六年生。ポニーテールにした長い黒髪と、ツリ目だが攻撃的ではない琥珀アンバーのような橙だいだい色の瞳がよく似合っている。この場にいる戦闘要員の中ではもつとも戦闘経験が浅い——というより、経験だけで言うなら素人同然なので、あの激戦の直後で食欲がないのは仕方がないだろう。

「時間的にはそろそろ夕食時ですから、間食は控えた方がいいかもしれませんよ？」

あつという間に小皿に取ったクッキーを平らたいげ、追加しようと大皿のトングに手を伸ばすベアトリーチェに、やんわりと忠告するのはツバキだ。

ツバキ・タカチホ。

〈難攻不落〉の二つ名を持つ、小学五年生の〈機獣少女〉。セミロングの黒髪を左側でサイドポニーにしており、瞳は蒼玉サファイアのような澄んだ青。可愛らしい見た目でありながら、年齢に似合わぬ落ち着いた雰囲気サファイアが板についている。

「大丈夫だって。育ちざかりだから」

「そうやって油断すると、悲惨な事になりますよ」

数時間前と似たような事を言う妹に対して、今度は姉のタオエンが忠告をした。

ちなみに、お茶などの準備をしたのもタオエンである。意外という訳ではないが、彼女はその手のスキルに長たけているらしい。

「はい」

聞き分けが良いのか、単純に『悲惨な事』になりたくないからなのか、ベアトリーチェはあつさりと大皿に伸ばした手を引っ込めた。

「ねえ、お兄ちゃん。私の活躍、ちゃんと見てくれた？」

じつとしていられない性分なのか、ベアトリーチェは隣の席のアサトに話題を振った。身長差があるため、自然と彼を見上げるような格好となるが、腕に抱きつく必要はない。

「ベアトリーチェ！　なんで、そうやっていちいちアサトにくつつくの!？」

その様子に、やみひめは堪たまらず抗議する。ちなみに、彼女はアサトの左側に座っており、彼はベアトリーチェとやみひめに左右を挟まれている形になる。

「あー。やみ子ちゃんって、独占欲が強いタイプでしょ？」

「違うもん！　とにかく、はーなーれーてー!」

「……………」

自分を挟んで攻防を繰り返す少女一人の間から、すっと立ち上がり、アサトは安全地帯に避難した——苦笑して事態を傍観していたツバキの隣だ。ちなみに、ツバキの座っている椅子はサイズのことで定員である。

「橘さん、逃げちゃ駄目ですよ。」

困ったような顔をするツバキ。しかし、それは迷惑というより、喜んではいけないと気持ちを押して殺そうとして出来なかったような、はにかむような困り顔だった。

なお、「ヘタレですね」というタオエンの一言は、ベアトリーチェとやみひめの不満の声に紛れて聞こえなかったふりをした。

「ベアトリーチェ、お前はもつと周りを見る。数の有利を利用しろ。味方を巻きこんでどうするんだ？」

「えー」

事態を收拾するため、アサトは今日の起動試験の事を思い出し、そう指摘すると、ベアトリーチェは不満そうな声を上げた。

「そうだよ！ あの小っちゃい鉄球がいっぱい降ってくるやつ、怖かったんだからね！」

「あれは確かに……」

当事者の二人が思い思いのリアクションをすると、さすがにベアトリーチェも気が咎めたのか、「ごめんなさい……」と謝罪の言葉を口にした。

「やみ子、お前は逆に周りを見るな」

「え？ どういう事？」

「力はあっても、戦い方はまだ知らないんだろ？ だったら下手な事は考えず、前に出て力押しで行け。背中は味方が護ってくれる。せっかくのツバキの援護が無駄になってた場面が、いくつもあったぞ」

「そうだったんだ……」

やみ子がはっとした表情でツバキを見ると、

「気にしないでください。私の援護が至らなかった部分もあります」

と、お為ごかしや謙遜ではないという意思表示のためか、いつもの澄まし顔でツバキは答えた。

『——橘アサト。其方は、戦術論などに精通しておるのか？』

不意に、スピーカーを通したような機械音声マシン・ヴォイスが会話に加わった。発信源はツバキ——の胸元に下げられた黒い勾玉まがたま。彼女のMBデバイス、その待機モードである。

「えっと……〈カグツチ〉、だったか？」

『うむ』

「いや、戦術とかにはまったく興味がない。ミリオタでもないしな」

『みりおた？』

「軍隊とか兵器に詳しい奴だよ。ミリタリーオタク」

ただ、と前置きして続ける。

「この星に来て、妙な知識が俺の中に増えている。知らない間に睡眠学習でも受けさせられたみたい……例えば、ベアトリーチェ」

「え、なに？」

「さつきやみ子が言っていた、小さな鉄球を雨みたいに降らせたやつ——あれはベアリング弾を内蔵したクレイモア弾頭、だろ？」

「そうだよ」

「俺はそんなもの知らなかった。なのに、あれがクレイモア弾頭だって判った」

アサトの言葉に、全員がしんと静まり返る。彼の言葉を信じていないというより、どうリアクションすればいいのか判らないのだろう。

「今日の戦闘を見ていて、誰がどう動くのが適切かイメージして、その通りにならなかったのが気になっただけだ。戦術論とかは知らん」

『然様か。なに、ちよつとした好奇心で訊ねてみたにすぎん。妙な事を言つてすまなかつた』

「いや、気にしないでくれ。言う機会があつて、よかつたかもしれない」

『……気遣い、感謝する』

一人と二基のやり取りに、微妙になりかけていた空気が戻る。すると、その後押しをするようにツバキが口を開いた。

「では 橘^{たちばな}さん、私も今日の戦闘の評価をしてください」

「え……ツバキは何の問題もなかったと思うぞ」

地球での戦いを見た時から、ツバキは戦闘慣れしている——というか、慣れていない感じが皆無だった。つまり、すでに戦士として一人前なのだろうと思っていた。実際、今日の戦闘を見て、それを確信した。少なくとも、悪かった点はないように思う。

なのだが……。

「……………」

すぐ隣から此方を見上げるツバキの表情は、明らかに不満げだ。

何か指摘する部分があつたのだろうかと思し、すぐに自分の間違いに気付いた。駄目な

部分を指摘するだけが評価ではないはずだと。

「——ふえっ!?!」

「ツバキは百点だからな、頭を撫でてやろう」

艶やかな黒髪を、サイドポニーが崩れないよう、優しく撫でる。がんばった子には褒美が必要だろう。もつとも、随分と安い褒美だが。

「あの、私、そんなつもりじゃ………あう」

ツバキが珍しく慌てた様子だったが、衆人環視の中で頭を撫でられる行為が恥ずかしいのか、すぐに俯いてされるがままになっていた。

(そういえば、こんな風にツバキの頭を撫でたのは何回目だろう)

地球で、何度かそういう機会があった。ほんの数日前の事なのに、その間に起きた出来事の衝撃が大きすぎて、ずっと昔の事のように錯覚してしまう。

「いいなー、ツバキちゃん。私も撫でてほしいなー」

「ツバキばかり、ずるい！ 私も！」

アサトが感慨のようなものに耽っていると、不意に前方から不満が上がった。ベアトリーチェとやみひめが、すぐ目の前に迫ってプレッシャーをかけてくる。

「……お前等は百点じゃないから駄目だ」

別に頭を撫でるくらいなんでもないが、ここで二人の言う事を聞いてしまうと、ツバキに申し訳ない。これは百点のご褒美という名目なのだから。

「……あの、私はもう充分なので、お二人を撫でてあげてください」

蚊が鳴くような細かい声が隣から聞こえた。見れば、ツバキは沸騰しそうなほど頬が赤くなっている。俯いているため表情が見られないのが、少し残念ではある。自分の事は気にしないでという、控えめなツバキらしい配慮だが、今回はこの状況を終わらせるための口実のように思えて、少し可笑しくなるアサトだった。

「あー、判った判った」

ツバキの頭に載せていた右手を上げ、やみひめの方へ。空いていた左手はベアトリーチェの方へ。それぞれの頭に載せ、優しく撫でる。

「うみゆー」

「ふみやー」

やみひめとベアトリーチェが、それぞれに恍惚とした表情で声を漏らす。まるで顎をごろごろと撫でられた猫のように。

橘アサトが年端も行かぬ少女達を撫で回し、恍惚とさせていく光景を、じっと見つめる少女がいた——カナコだ。

カナコ・T・シングウジ。

《戦姫》の二つ名を持つ、高校二年生の《機獣少女》。長く艶やかな黒髪と、黒瑪瑙を思わせる黒い瞳。派手ではないが隙なく整った容貌は、静謐な雰囲気と相まって、東方大陸美人を体現している。

彼女は一言も発さず、ずっと事態を静観していたのだ。

流遠やみひめとベアトリーチェの事はよく知らないが、ツバキが自分の知らない相手に身体を許しているのは、意外を通り越して驚きだった。

しかし、この気持ちは何だろう。

妹のように思っているツバキを取られた嫉妬もある。だが、それとは違う、モヤモヤした感情が渦巻いている。

（これは、あの人に対するもの……？）

橘アサト。

ツバキ曰く、カナコの兄かもしれない少年。

彼が少女達に優しくする度、正体の判らない、痛みのような感覚を覚える。

胸を締め付けられるような。

自分の居場所を奪われてしまったような。

「……ん？」

「——っ!？」

彼と目が合ってしまった。

さりげなく逸らしたつもりだが、バレているかもしれない。

（見ていたのに気付かれたらどうか……？）

そっと視線を戻すと、彼は少女達の頭から手を下ろし、カナコに向かって躊躇いがちに言った。

「あ……よければ、シングウジさんも撫でようか？」

「……………へっ」

理解が追い付かない。

彼が何を言っているかは聞き取れたが、意味が理解出来ない。

（私の頭を撫でてくれるという意味……よね？）

なぜだろう。

自分はそんな物欲しそうな顔をしていたのだろうか。

「……あの、どうしてですか？」

極めて平静を装って、当然の質問をする。地球ではどうか知らないが、ゼーナの一般常識として、頭を撫でるといふのは小さな子供に対してする行為のはずだ。恐らくだが、進んで頭を撫でられたい女子高生は少数派だろうと思う。

少なくとも、カナコにそういった願望はない。

「いや、今日の戦闘で一番がんばったのはシングウジさんだろうから……って、こんな嬉しいはずないよな。悪い、俺も訳が判らなくなってるっぽい」

彼はそう言って、気まずそうに苦笑いをした。

がんばった者にご褒美をあげるなら、カナコも当然その対象のはずで、そんなタイミングで目が合えば、彼女がそれを望んでいると考えるのは、そう的外れでもないだろう。

「今のは聞かなかった事に——」

「……お願いしてもいいですか？」

彼の言葉を遮り、カナコは言った。

「……え？」

「……………」

「えっと……本当に？」

「冗談だったんですか？」

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が談話室に横たわる。

(私、なんであんな事言ったんだろう……)

言わなければよかったという後悔が、カナコの胸に去来する。あんなのは冗談か、社交辞令の一環で、彼も本気で言った訳ではなかったに違いない。

カナコがそんな風に悔やんでいると——

「じゃ、じゃあ……」

彼が椅子から腰を上げ、此方に向かってくる。当然だ。撫でるとしたら、手の届く距離ではないのだから。

とはいえ、直線距離にして一メートルもない。なのに、そのわずかな距離にも関わらず、

彼が手の届く距離までやってくる時間が、途轍もなく長く感じられた。

そして――

「――んっ」

彼の手が自分の髪に触れた瞬間、カナコの身体に『なにか』が奔った。

（知ってる感覚だ……）

『なにか』の正体はすぐに判った。優しく頭を撫でられる感触に、カナコは覚えがある。

（懐かしい感触――）

何時か、誰かに、同じようにされた事がある。

（嗚呼……この人は本当に――）

俯^{うつむ}けていた顔を少し上げ、彼の顔を視界に入れる。目が合っても、もう気まずいとは感じない。

だって、この人は――

「あのっ、私――」

「お待ちせ、みんな。クラウの検――あれ？」

カナコが意を決して言葉を紡^{つむ}ごうとした矢先、談話室の扉が開き、ロゼットが現れた。その背後には、検査が終わったであろうクラウの姿もある。

「えっと、ひよっとして……また？」

「？」

室内の空気がおかしい事に気付いたのだろう。ほんの数時間前にも、ロゼットは同じようなタイミングで現れた。状況が判らず、きよんとするクラウも含めて。

「あ、それよりも朗報だよ」

良い意味で大雑把なのか、あえて空気を読まなかったのか、それは当人にしか判らないが――ロゼットは朗報を告げるに相応^{ふさわ}しい朗らかな口調で言った。

「何かあつたんですか？」

どちらであるにせよ、この空気を変えるには良いきっかけだと判断したのだろう。ツバキが訊^{たず}ねると、ロゼットは言葉を続けた。

彼女の口から告げられた朗報、それは〈ブレイクス〉が各地で撤退を始めたというものだった。

あとがき

どうも、流遠亜沙るとおです。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十三話をお届け致します。

三ヶ月半ぶりとなります。単純に正月やバレンタイン、サイト開設日などが重なる上半期ですが、その上『スパロボV』が出たらもう、どうしようもありません。『スパロボ』が出たらプレイしなきゃいけない呪いを受けてるんです嘘です本当にごめんなさい。

言い訳ばかりしていても仕方ないので本編について。

まず、アバンに出てきた『機獣少女』の先輩後輩。アは、第十八話に登場した名もない二人です。決めてないので、名前を思いついた方は教えてください。

そしてキリエが第二十一話以来、二度目の登場です。戦闘シーンは初ですが、今回はちょっとだけ。相変わらず残念な娘です。

あとはクラウのMBデバイスである〈ラインハイト〉の命名。劇中で語られている〈ジェノクラウエ〉の強化プランうんめん云々は、あくまで『ゾイやみ』世界での設定です。

最後にカナコ——JKの頭を撫なでたいです。

それでは謝辞しで締めたいと思います。

まずはクラウやロゼットに関するチェックをお願いしている紙白さんに感謝を。ゾイドとしての〈ラインハイト・ジェノクラウエ〉、いつまでも待っています！

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

さすがに年内には完結させたいです。最後までお付き合いくださいますよう、何卒なにしろ！

2017 / 4 / 11 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る